

高井田横穴群 III

1991年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市には貴重な文化財が数多くありますが、その中でも最も有名なもの一つに高井田横穴群があります。高井田横穴群は、破壊の危機に晒されたこともありましたが、その大半は保存され、そのごく一部であった史跡指定範囲も、平成2年3月に追加指定を受けることによって、35,000m²へと拡大されました。

柏原市教育委員会では、高井田横穴群の保存を計りながら、有効に活用していくために、平成元年度から3年計画で史跡公園整備事業を実施しております。本書で報告する調査も、整備事業の一環として実施したものであり、史跡指定隣接地への史跡公園関連施設の建設計画を立案するために実施したものです。調査の結果、横穴や未完成の横穴が発見され、当然のことながら、これら貴重な遺構を保存しつつ、建設可能な施設、およびその配置等について検討を進めています。

貴重な文化財を保存していくのは当然のことですが、その一方で、この貴重な文化財に息吹を与え、現代の私たちに語りかけてくれるような姿で整備することも重要であると考えます。高井田横穴群を訪れた市民の方々が、古代の空気を少しでも感じていただけるような整備を実現するために努力していくつもりです。どうか、市民の方々の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成3年3月

柏原市教育委員会

教育長 穂 刀 和 秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、平成2年度に市公共事業として実施した高井田横穴群の発掘調査報告である。
2. 試掘調査は、1990-1次調査として平成2年1月22日から2月21日まで実施し、発掘調査は、1990-2次調査として平成2年7月16日から9月10日まで実施した。
3. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が担当した。
4. 本書の編集・執筆は、すべて安村が担当した。
5. 本書で使用した方位は断わりのない限り磁北、座標系は三級基準点測量に基づいて第VI系を使用、標高はT.P.である。
6. 調査・整理の参加者・機関は下記の通りである。

松井隆彦	竹下 賢	空山 茂	山田寛顯	北野 重	桑野一幸
寺川 欽	生駒美洋子	岡田嗣生	北林隆広	小西千賀恵	佐藤芳玲
佐藤 航	筒井隆史	山川正裕	井上岩次郎	奥野 清	谷口鉄治
津田美智子	尾野知永子	有江マスミ	乃一敏恵	横関勢津子	
壱山建設株式会社		関西航測株式会社			

目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 周辺の横穴群.....	2
第3章 遺跡の概略.....	4
第4章 調査の概略.....	6
第5章 調査成果.....	8
1. 試掘調査.....	8
2. 土層.....	12
3. 遺構.....	14
4. 遺物.....	25
第6章 まとめ.....	30

挿 図 目 次

図-1 遺跡分布図.....	3
図-2 調査地位置図.....	5
図-3 調査地地形測量図.....	7
図-4 トレンチ位置図.....	8
図-5 トレンチ土層図.....	9
図-6 調査区南壁土層図.....	12
図-7 遺構平面図①.....	13
図-8 4-44号墳.....	14
図-9 4-44号墳横断面土層図.....	15
図-10 4-45号墳.....	17
図-11 4-45号墳横断面土層図.....	18
図-12 4-45号墳遺物出土状況.....	19
図-13 遺構平面図②.....	20
図-14 4-46・47号墳横断面土層図.....	21
図-15 未完成横穴-1	23

図-16	未完成横穴-1・2横断面土層図	24
図-17	横穴出土土器	26
図-18	埴輪①	27
図-19	埴輪②	28
図-20	4-45号墳出土鉄製品	29

図版目次

- 図版1 試掘調査
- 図版2 遠景・土層
- 図版3 調査区南西部
- 図版4 4-44号墳
- 図版5 4-44号墳土層
- 図版6 4-45号墳
- 図版7 4-45号墳
- 図版8 4-45号墳
- 図版9 4-45号墳
- 図版10 4-45号墳土層
- 図版11 調査区北西部
- 図版12 4-46号墳
- 図版13 4-47号墳
- 図版14 未完成横穴-1
- 図版15 未完成横穴-1
- 図版16 未完成横穴-2
- 図版17 調査区東部
- 図版18 遺物
- 図版19 遺物

第1章 調査に至る経過

柏原市教育委員会では、平成元年度より3年計画で、史跡高井田横穴群の史跡公園としての整備事業を進めている。本書で報告する調査地は、高井田横穴群周辺で実施された区画整理事業に伴って、教育施設用地として設定され、柏原市に移管された土地である。当初、この位置も区画整理の対象地とされていたが、横穴の存在が予想されること、および削平された場合には地下水の影響などから保存されている横穴の保存状況に影響を及ぼすと考えられたため、柏原市教育委員会では大阪府教育委員会と共に、区画整理組合に対して、この地の現状保存を要望し、保存されることになったものである。その際に、他の場所に設定されていた教育施設用地をこの地に充当し、当面は施設の建設を見送ることになった。そのため、当該地は横穴群の保存区域であるが、史跡指定地には含まれておらず、東側の宅地造成地より約5m高い位置に当たる。

柏原市教育委員会では、この教育施設用地を有効に活用し、史跡公園に関連する施設の建設用地にしたい考えである。しかしながら、当該地には横穴の存在が予想されるため、事前に調査を実施し、遺跡の状況を把握する必要があった。そのため、平成2年1月22日より試掘調査を実施した。試掘調査の結果、2基以上の横穴が存在することが確認され、計画立案に先立って、全面調査を実施することが必要となった。これを受けて、7月16日より、全面の発掘調査を実施した。発掘調査の結果、横穴4基、未完成の横穴2基が検出され、天井の崩落は激しいものの、良好な状態で遺存していることが確認された。

これらの遺構を保存することを前提にすると、当初の計画案の一つであった歴史資料館の建設は、その構造・スペース等から困難であることになった。そのため、現在では休憩施設等の建設を計画、3年計画が終了した平成4年度に、当該地の整備を実施する予定である。

この発掘調査と平行に、整備事業に伴った史跡内の発掘調査も実施している。平成2年度は史跡指定地東半の整備事業と、これに先立つ遺構確認、および公開予定横穴の調査を実施した。調査を実施した横穴は13基、それ以外に初期の横穴式石室を主体部とする古墳、火葬墓などの調査を実施している。これらについては、平成3年度の整備事業完了後に、整備事業の内容と共に報告する予定である。従って、本書では史跡指定地外の教育施設用地に対する発掘調査についてのみ報告するものである。

第2章 周辺の横穴群

横穴は、岩盤に掘り込んで造られた洞穴を埋葬施設とする墓制であり、大阪府下では柏原市にのみ見られるものである。柏原市では、高井田横穴群、安福寺横穴群、玉手山東横穴群、平尾山古墳群太平寺支群の4箇所で横穴群が確認されている。

安福寺横穴群は、西北西に開く谷の斜面に営まれており、安福寺参道の北側に17基、南側に18基、そこから北西に約100mの位置に5基、計40基の横穴が確認されている。時期は高井田横穴群とほぼ同じ6世紀中葉から7世紀初頭に営まれたものと考えられる。騎馬人物像の線刻画で有名であり、陶棺の使用が認められる点が注目される。後述する玉手山東横穴群でも陶棺が1例確認されているが、高井田横穴群では出土例がない。

玉手山東横穴群は、玉手山丘陵の南東部に位置し、東へ延びる尾根の南斜面に2箇所、北斜面に1箇所の計3箇所で、35基の横穴が確認されているが、その大半は造成によって破壊されてしまった。玉手山東横穴群では、高井田・安福寺横穴群よりも造営開始時期が少し遅く、6世紀後葉と考えられる。比較的小形の横穴が多く、敷石や排水溝が多用されること、他の横穴群では見られない箱式石棺が存在することなどの特徴がある。

高井田・安福寺・玉手山東横穴群は、いずれも二上山系の玉手山凝灰岩層に営まれている。ところが、平尾山古墳群太平寺支群⁽³⁾の横穴は、かなり風化した花崗岩層に営まれている。横穴は6基確認されているが、平面形が羽子板形を呈する小形の横穴である。時期は6世紀末葉から7世紀後葉頃にかけてと考えられ、その立地、規模、時期等から、前3者とは区別したうえで、その関連性を考えていかなければならない横穴群である。

高井田横穴群で確認されている155基の横穴に、これらの数を加えると、柏原市域で236基の横穴を確認していることになる。今後、高井田横穴群の整備事業に伴って、資料の集成、整理に当たりたいと考えている。

註

- (1) 水野正好・福西正幸・久貝健『玉手山安福寺横穴群調査概要』大阪府教育委員会 1973
桑野一幸『玉手山遺跡』柏原市教育委員会 1987
- (2) 堀江門也『柏原市玉手山東横穴群発掘調査概報』大阪府教育委員会 1969
- (3) 北野重『平尾山古墳群 一太平寺山手線建設に伴う その3—』柏原市教育委員会 1990

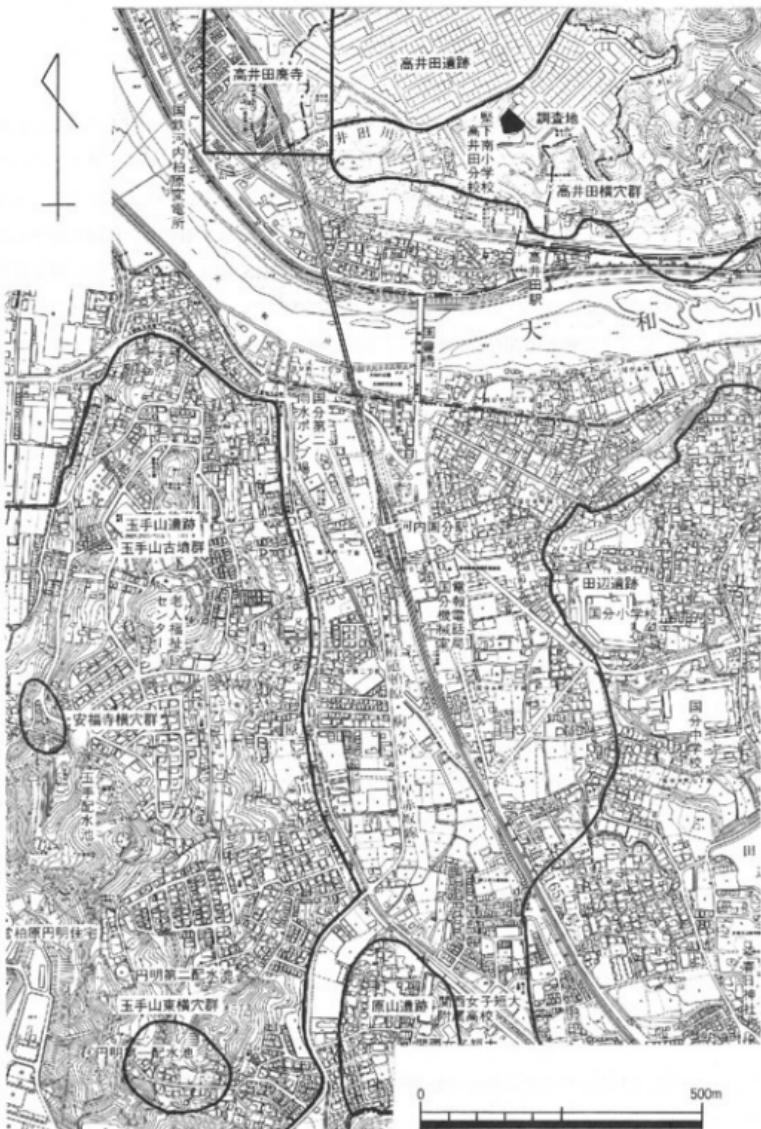


図-1 遺跡分布図

第3章 遺跡の概略

高井田横穴群は、二上層群に含まれる玉手山凝灰岩層に分布している。この玉手山凝灰岩層は、柏原市高井田、安福寺西側、玉手山丘陵南東部に露頭し、横穴群の分布に一致する。以上の事実から、横穴群は凝灰岩層の露頭する地を選定して営まれていていることが理解できる。高井田に限って見てみると、横穴は必ず凝灰岩層に造られており、凝灰岩層以外の花崗岩層や大阪層群には造られていない。逆に、横穴群中央北寄りの風化が強い凝灰岩層を除くと、凝灰岩層の見られる場所には必ず横穴が分布すると言っても過言ではない。このように、横穴の位置を決定する際に、凝灰岩層を意識的に選定すると共に、凝灰岩層の露頭範囲をかなり正確に把握していたと考えられる。

高井田横穴群は、1974年の大阪府教育委員会による分布調査によって、4つの支群にグループ化され、146基が報告されている。⁽¹⁾ 南へ開く谷によって支群が区別されており、東方から第1～4支群となる。これに、高井田川の北側、平尾山古墳群安堂支群第7支群1号墳の横穴1基を加えると、横穴の総数は147基となる。この支群区分には、少なからぬ問題点を含んでいるため、従来は1973年の大阪文化財センターによる分布調査番号を使用してきたが、混乱を生じる恐れがあるため、今後は便宜上、大阪府教育委員会の横穴番号を使用することにする。⁽²⁾ この区分によると、今回の調査地は第4支群に含まれる。第4支群では、1984年の調査によつて発見されたC号墳とD号墳があり、これらを從来確認されていた41号墳に統いて42・43号墳とする。そのため、今回の調査によって発見された横穴は44～47号墳と呼称することになる。⁽³⁾

横穴の総数は、1987年3月の時点で158基と報告したが、今回の調査によって4基を新発見する一方、第1支群の分布調査で新発見とした2基が筆者の誤認であったことが確認され、1990年の史跡内の調査によって第2支群51～55号墳が横穴でないことが確認されたことから、1991年3月現在の総数は155基である。これらの中で10基は既に破壊されている。また、史跡指定地内に存する横穴は117基である。⁽⁴⁾

なお、高井田横穴群の詳細については、史跡整備事業の報告（1992年度刊行予定）に譲ることにする。

註

- (1) 田代克己『平尾山古墳群分布調査概要』大阪府教育委員会 1975
- (2) 中西靖人『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』大阪文化財センター 1974
- (3) 安村俊史・仲井光代『高井田横穴群I』柏原市教育委員会 1986
- (4) 安村俊史・近藤康司『高井田横穴群II』柏原市教育委員会 1987

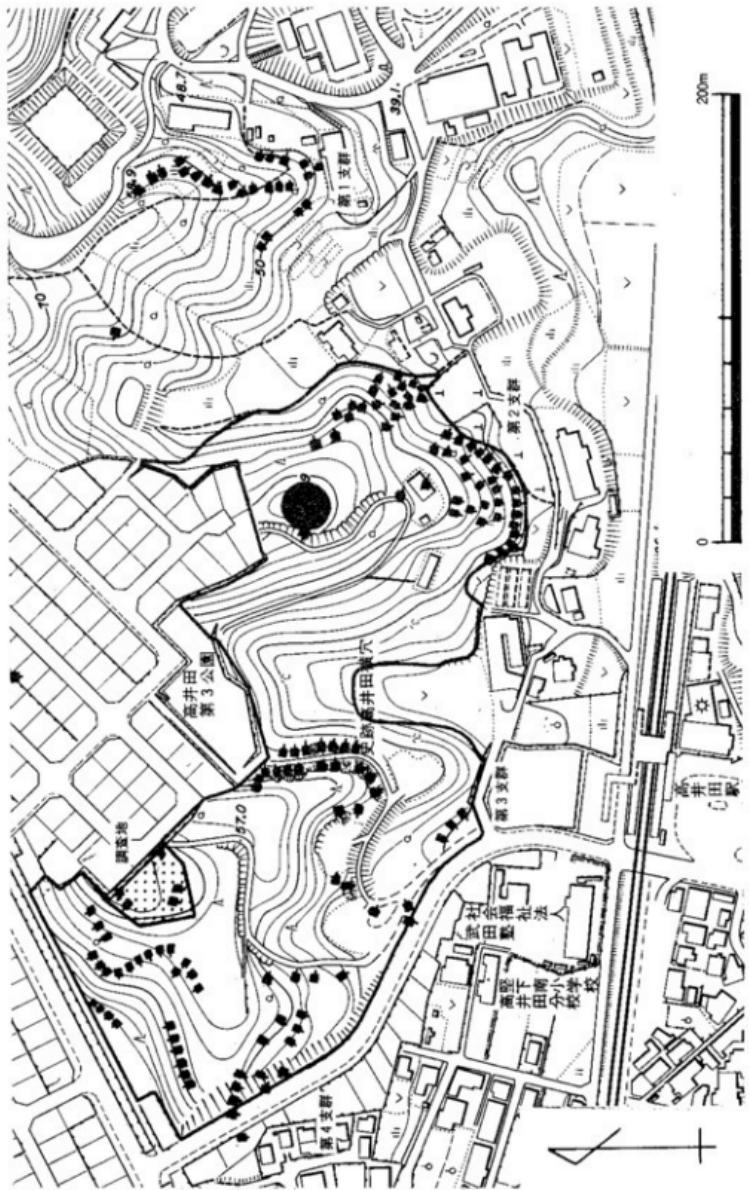


図-2 調査地位置図（大槻内は史跡指定地）

第4章 調査の概略

調査地の現状は、標高59～63m、東側の住宅地との比高差は5m、面積は約1,000m²である。区画整理事業以前には、3棟の家屋が建っており、この家屋へ通じる道が南からのびていた。これらの家屋は、区画整理事業の着手と共に解体され、調査時には草叢となっていた。調査地は、周辺では最も標高が高く、東側には第2支群と第3・4支群を限る大きな谷が開き、南側には第3支群と第4支群を限る小さな谷が開く位置に当たる。

調査は、遺構の確認と遺構面の深さを確認するための試掘調査から実施することにした。調査地で予想される遺構としては、横穴はもちろんのこと、前期古墳、古墳時代中期末～後期初頭の木棺直葬墳、火葬墓などが考えられた。古墳に関しては、過去の周辺の調査によって埴輪片が出土していることから、また、火葬墓に関しては、北東300mの位置で29基の火葬墓が検出されていることから存在の可能性が考えられた。これらの遺構を確認するため、最高所と調査地縁辺にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、北側と西側に2基の横穴が存在することが確認された。

試掘調査結果をもとに、7月16日より発掘調査に着手した。調査は、土砂の搬出が不可能なため、東西2区に分けて実施することにし、試掘によって遺構の確認された西半から着手した。調査の結果、第3支群と第4支群を限る谷の最奥部に当たる調査地南半で、天井の崩落した横穴2基（44・45号墳）と、未完成の横穴と考えられる遺構2基を確認した。また、調査地北端でも天井部の崩落した横穴（46号墳）と、46号墳の墓道から枝分かれしてのびる墓道（47号墳）を確認した。調査地中央には、東西にのびる溝状の地形が見られる。これは、人工の地形であるが、近世以降のものであり、横穴に関するものではない。横穴は、天井が崩落しているものの、墓道が非常に良好な状態で残存していた。これによって、墓道の共有関係や埋没状況に関する良好な資料を得ることができた。また、保存を前提とした調査であることから、一部残っている天井を保存するため、各横穴とも玄室は完掘していない。

横穴以外の古墳に関しては、やはり埴輪片が出土したが、その痕跡を確認できなかった。特に古墳時代前期末葉と考えられる埴輪は、調査地北側に集中することから、46号墳玄室付近に古墳が存在したことは疑いないようである。

これらの調査成果について、8月18日に現地説明会を開催した後、東半の調査に着手した。しかし、東半からは遺構だけでなく、遺物も全く発見されなかった。しかしながら、調査地東部で、凝灰岩層の上に大阪層群の砂礫と粘土の互層が堆積する状況が確認できた点は、大きな成果であった。

これらの遺構を保存しつつ、施設の建設についての計画を検討中である。

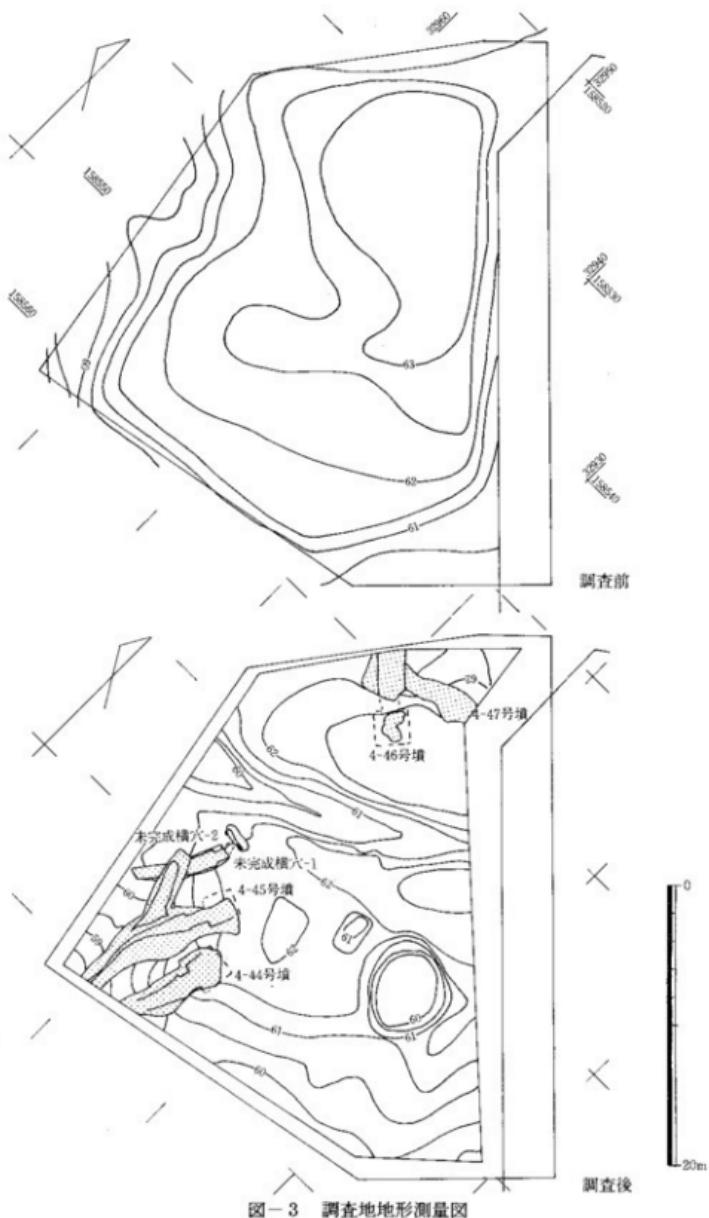


図-3 調査地地形測量図

第5章 調査成果

1. 試掘調査

試掘調査は、6本のトレンチを設定し、実施した。まず、調査地中央から南側にかけて4本のトレンチを設定した。これは、墳丘を有する古墳の存在が予想される位置に設定したものである。続いて、北側と西側の史跡指定地との境界に沿って第5・6トレンチを設定した。これは、横穴の存在を確認するために設定したものである。以下、各トレンチについて、概略を記述する。

第1トレンチ 62mの等高線に沿って設定した東西方向のトレンチ。幅1.5m、長さ15mを測る。トレンチ中央部では、地表下約20cmで地山に至り、東西に緩やかに傾斜している。

第2トレンチ 第1トレンチ中央部から、直交する形で設定した南北方向のトレンチ。幅1.5m、長さ5.5m。北端では地表下約40cmで地山に至り、南端では約80cmで地山に至る。地山は北から南へ緩やかに下がっており、比高差は約110cmとなる。地山直上には、20cm以下の厚さの褐色粘質土が堆積する。自然地形と考えられ、遺物は全く出土していない。

第3トレンチ 第2トレンチと逆に、第1トレンチの北側に設定したトレンチ。幅1.5m、長さ7m。地表下15~30cmで地山に至る。地山はT.P. 62.0mの高さではほぼ水平をなす。トレンチ北端には、撤去家屋のコンクリート基礎、および2本の水道管が見られる。これらの状況から、第3トレンチ周辺は、家屋建築時に地山まで削平されたものと考えられる。遺物は全く出土していない。

第2・3トレンチは、第1トレンチでの地山の形状から古墳が存在することも考えられたために設定したものである。しかし、古墳の存在を示すような遺物、遺構は全く検出されなかった。

第4トレンチ 調査区最高所に、幅1.5m、長さ17mで設定した南北方向のトレンチである。トレンチ中央から北側にかけては、50cm前後の厚さの盛土が見られる。トレンチ北端では、この盛土、および薄い淡褐色土を除くと地山に至る。トレンチ中央でも、地表下約50cmで地山に至るが、その間は、

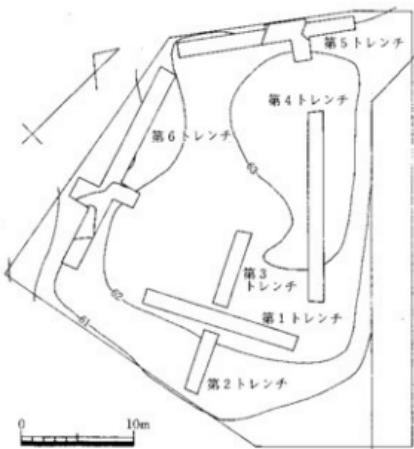


図-4 トレンチ位置図

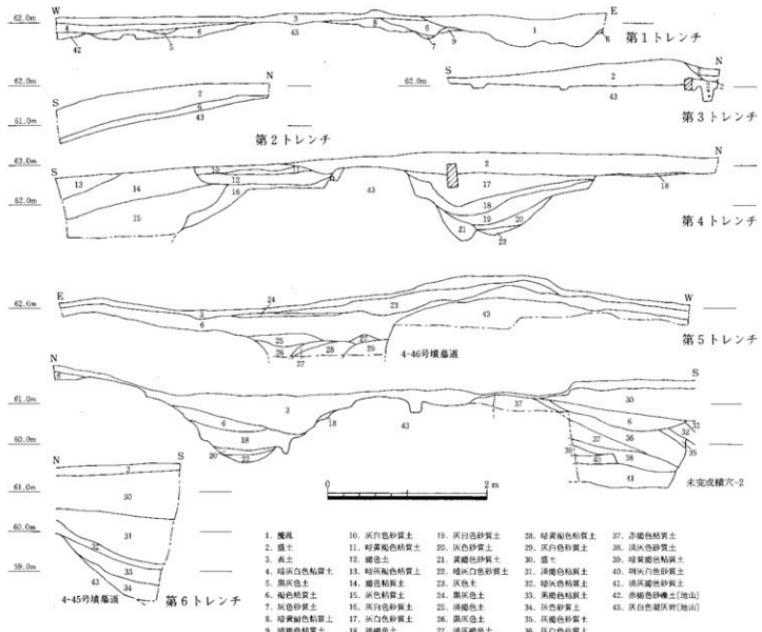


図-5 トレンチ土層図

深い溝状の地形を呈する。その最上層には、撤去家屋のコンクリート基礎が見られるが、その下に5層の堆積が見られ、この溝が家屋建築以前の遺構であることが確認できる。そのため、横穴の墓道、古墳の周濠等の可能性を考慮しつつ掘り下げたが、最下層の第22層暗灰色砂質土から、ようやく瓦片が出土した。瓦は近世、もしくは近代と考えられる平瓦片であり、これによって、この溝状遺構の時期がほぼ確認できた。トレンチ南側は、撤去家屋の基礎等と共に、深い攪乱が見られた。深さ1.6mまで掘削したが、完掘はできなかった。この攪乱は、全面調査によって、家屋解体時に、廃材を処分するために無断で掘られたものであることが確認された。

第5トレンチ 調査地北西部に、史跡指定地との境界に沿って設定したトレンチである。幅1.5m、長さ16m。後に、遺構の規模を確認するため、一部拡張した。土層は、基本的には、表土、灰色土、褐色粘質土、地山と上層から続く。トレンチ東側では地表下30~40cm、西側では40~60cmで地山に至る。トレンチ中央では、この地山が垂直に近く落ち込んでいることが確認された。落ち込んでいる面が、非常に平滑に仕上げられており、これまでの調査例から、横穴の一部であることがほぼ疑いないと考えられた。埋土は、細かいブロック状の土層をなしている。この遺構は、幅約3mで南北にのびていることから、北から南へ掘り込まれた横穴の玄室部分ではないかと推定し、その形状・規模を確認するため、南東方向へトレンチを一部拡張した。その結果、遺構の東辺が直角に東へ折れることが判明した。更に北側にも一部拡張したが、遺構の西辺は直線状にのびていた。以上の状況より、北から掘り込まれた横穴の羨道から玄室部であり、天井が落盤したものと推定した。しかし、全面調査によって、46号墳と47号墳の墓道分岐部であることが、後に確認されている。第5トレンチからは、須恵器、土師器、埴輪が出土している。

第6トレンチ 調査地西端に、史跡指定地との境界に沿って設定した幅1.5m、長さ20mのトレンチである。トレンチ中央より北側では、地表下20cm前後で地山に至り、過去にかなり削平されているようである。トレンチ北側では、深さ170cmの溝状遺構が見られ、埋土の状況等から、第4トレンチで確認された溝状遺構に統くものと考えられた。トレンチ中央部から南にかけて、横穴と考えられる遺構が検出され、この遺構を切る落ち込みがトレンチ南端へと続いていた。横穴の形状を確認するために一部を拡張した結果、この遺構の西側に墓道状にのびる遺構が確認されたが、床面が1mも高く、不自然に思えた。後の全面調査によって、未完成横穴-1と2の交差部分に当たっていることが判明した。また、トレンチ南端の落ち込みも、全面調査によって、45号墳の墓道埋土上層に当たることが判明した。

各トレンチの地山は、第1トレンチの西端で砂礫土が見られる以外は、すべて灰白色凝灰岩層であり、調査地ほぼ全域に凝灰岩層が広がっていることが確認された。しかし、凝灰岩の上部はかなり風化しており、砂質土状となっていることも確認された。

2. 土層

調査区中央付近では、地山がかなり削平されており、表土直下で地山が検出される。調査区南壁の土層を見ると、地山が緩やかに東へ下がり、西側へは約2.6m下がっている。調査区のほぼ全域で、灰白色凝灰岩の地山が見られ、横穴、および未完成横穴は、すべてこの凝灰岩層に造られている。ただし、調査区南東部では、凝灰岩層が軟質の淡黄灰色となる。更に、凝灰岩層の一部に大阪層群が堆積している。大阪層群は、上層より粘土、細砂、砂礫土、細砂、砂礫土、粘質土の順に層をなす。調査区中央付近が谷状の地形を呈していたようであり、その周辺を中心に大阪層群が堆積し、その東西は、流失したためか、凝灰岩層が地山となっている。

調査区西側の凝灰岩層を掘り込んで第4支群44号墳と45号墳の墓道が掘られている。44号墳の墓道左側壁は垂直に近い壁面をなし、その肩部にテラス状の遺構とピット状の痕跡が認められるが、性格は明らかにできなかった。墓道右側壁は左側壁に比して、緩やかな壁面となる。

45号墳は、断面U字状を呈する墓道で、壁面の傾斜も緩やかである。45号墳から西側は、更に地山が下がっている。

出土遺物の大半は遺構埋土から出土しており、遺物包含層は全く認められない。

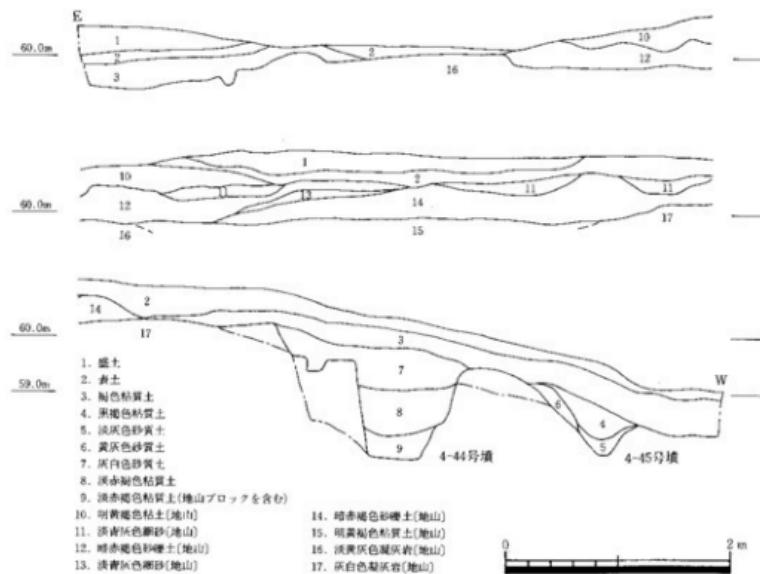


図-6 調査区南壁土層図

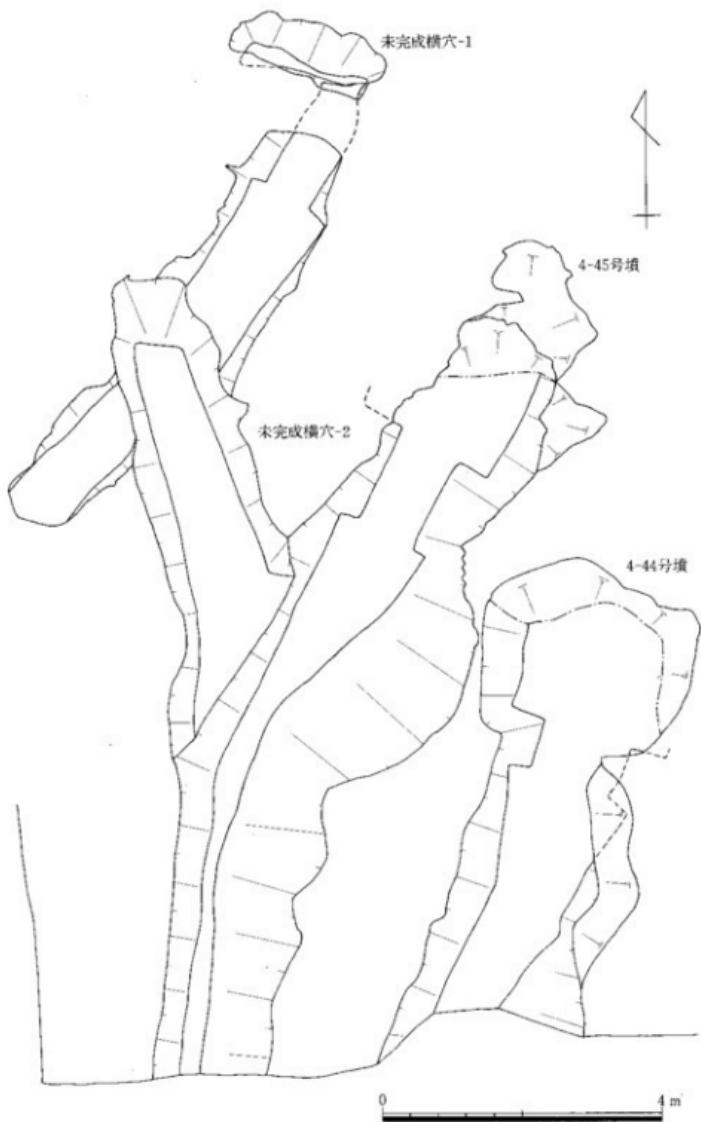


図-7 遺構平面図①

3. 遺構

第4支群44号墳

調査区南側で検出された第4支群44号墳（以下4-44号墳と記述）は、玄室から羨道にかけての天井部が崩落しており、天井の残存している玄室奥壁部は、天井崩落の危険性が高いため、調査を行なっていない。玄室は、玄門部での幅が233cm、長さは188cm以上である。右側壁での壁面の高さは118cm、その高さからドーム状の天井に移行し、天井の高さは180cm前後であったと推定される。壁面は平滑に仕上げられるが、床面と壁面の境界は、やや不明瞭となる。

羨道は、長さ73cm、羨門部での幅120cm、玄門部での幅は130cmを測り、やや内側に開く平面形となる。高さは127cm以上を測るが、天井の構造は不明である。羨道は玄室のほぼ中央に取り付き、右側壁の仕上げが、左側壁よりも丁寧である。

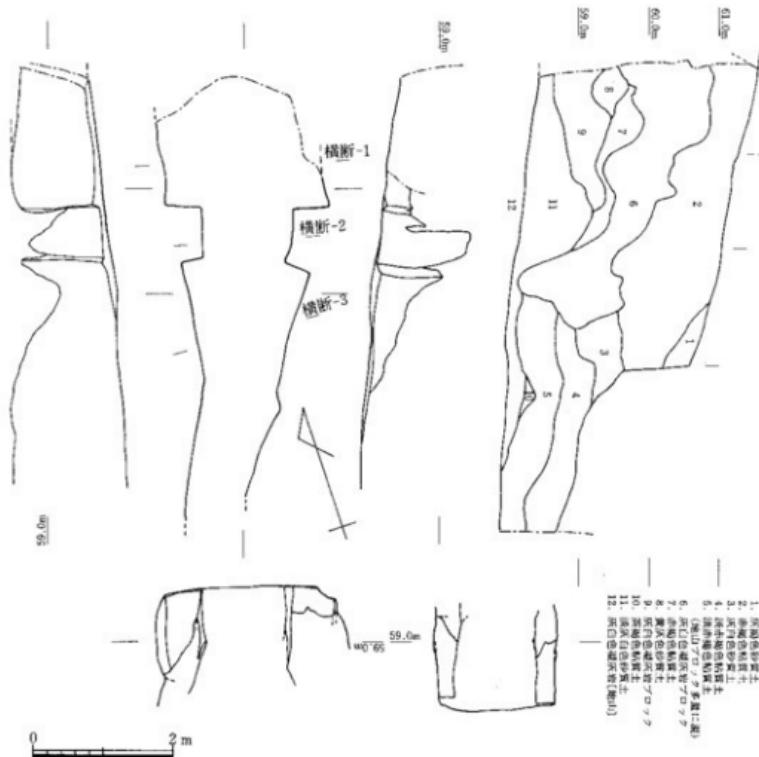


図-8 4-44号墳

墓道は先端へ向かうにつれて、徐々に西へ振り、調査区外へ続いている。羨門部での幅は184cm、そこから徐々に幅を減じていき、調査区南端での幅は83cmとなる。長さは380cm以上、調査区南端での壁面の高さは164cmとなる。

横穴の開口方向は、S-18.5°-W。床面の平均勾配は5.5°、調査範囲内での比高差は55cmを測るが、墓道床面が比較的平坦であるのに対して、玄室から羨道にかけての傾斜は強い。

埋土の状況を観察してみると、横穴掘削後、間もなく天井・壁面の緩やかな崩壊が進んだことを示す第11層淡灰白色砂質土が床面直上に見られる。その後、第9層灰白色凝灰岩ブロックの堆積が、玄室天井部中央付近の崩落を示している。漸くの時をおいて、激しい崩落があったことを示すのが、第6層灰白色凝灰岩ブロックである。第6層は、玄室だけなく、墓道にも一部及んでいることから、この時期に羨道の天井も崩落したと考えられる。この2度にわたる天井崩落の間に、漸くの時間があったことを第7層赤褐色粘質土が示している。第7層は、雨水等によって流入したと考えられ、玄室から羨道への傾斜が見られることから、一度めの崩落で、玄室の天井の一部に穴が開いていたと考えられる。一方、墓道上に堆積する第4・5層の赤褐色粘質土は、第6層との前後関係が不明であり、第7層と同時期の可能性も考えられる。そして、2度

めの崩落で天井はほぼ崩落し、それ以後、流入土の第2層赤褐色粘質土が堆積している。

床面からは、全く遺物が出土しておらず、出土した遺物（1～4、20、21、34、35）は、すべて第2層赤褐色粘質土から出土したものである。遺物の中には、6世紀後葉の須恵器が含まれており、1・2の蓋杯のようにセットをなす遺物も出土していることから、第2層の年代を6世紀後葉～末葉と考えてよいと思われる。そうすると、横穴の掘削は、それより古いくことになるが、床面から全く遺物が出土していないことから考えると、埋葬が行なわれていない可能性が高く、横穴掘削中、もしくは掘削後すぐに天井が崩落し、埋葬が行なえなかつたのではないかだろうか。そのように考えると、横穴の掘削も6世紀後葉頃と考えることができる。

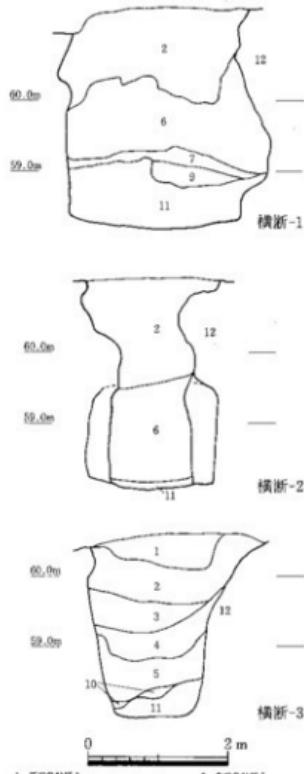


図-9 4-44号墳横断面土層図

第4支群45号墳

4-45号墳は、4-44号墳に平行するようにのびており、S-27.5°-Wの方向に開口する。玄室・羨道の平面形は比較的整美であり、墓道はやや西へ振った後、東へ振り、徐々に幅が狭くなる。

玄室の幅は玄門部分で203cm、長さは左側壁で168cm以上となる。壁面の高さは約114cm、壁面と天井の境には、15cm前後の幅の切り込み段がみられる。左右両側壁と右前壁の一部で確認できることから、おそらく玄室の四周全体に存在したと考えられる。ただ、段の切り込み角度が40°前後の傾斜をもち、やや粗雑な印象を受ける。天井はドーム状になると推定されるが、ほぼ全体が崩落している。なお、奥壁部は未調査である。

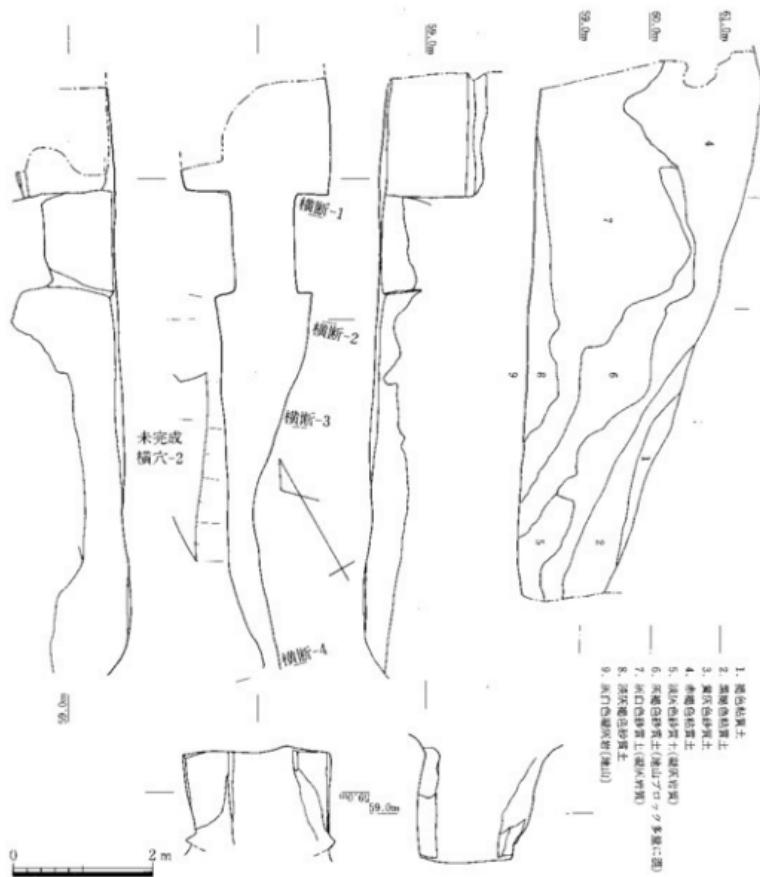
羨道は玄室のほぼ中央に取りつき、縦長の平面形を呈する。羨道の幅は玄門部で96cm、羨門部で92cm、長さは144cmである。壁面の高さは、右側壁の最も残存状態の良好な部分で100cmを測り、この位置からアーチ状の天井に至ると思われるが、崩落のため確認できない。

墓道は、羨門部で幅137cmを測り、先端へ向かうにつれて狭くなり、調査地南端での幅は24cmとなる。長さは550cm以上、最も残存状態の良好な部分での壁面の高さは144cmである。右側壁は垂直に近くなるが、左側壁は傾斜が緩やかである。

床面の勾配は緩く、平均傾斜角は2°となり、羨道から墓道にかけて凹凸もみられる。墓道の右側壁は、未完成横穴-2の墓道とつながっている。未完成横穴-2の墓道床面は、4-45号墳墓道床面より70cm前後高い位置にある。

埋土の観察から、横穴掘削後、壁面の微弱な崩落がみられたことを第8層淡灰褐色砂質土が示している。その後、第7層灰白色砂質土が大量に堆積している状況から、天井が完全に崩落したと考えられる。天井が玄室よりも低い羨道部は、凝灰岩の厚みが最も厚かったと考えられ、そのため、第7層も羨道部分が最も厚く、墓道前面には及んでいない。再に周囲の崩壊が続いたことを第5・6層の砂質土が示しており、その上層に堆積する第4層赤褐色粘質土は、44号墳でもみられたように、崩壊が完了した後の自然流入土である。第4層の堆積後も、崩壊が緩やかであった墓道部分は凹地となり、溝状を呈していたようである。そのため、若干の滯水があったようであり、第2層黒褐色粘質土がみられる。

未完成横穴-2床面は、横断面上層図-3でみると、第7層灰白色砂質土の上面と一致する。前述のように、未完成横穴-2と4-45号墳の床面の比高差が約70cmもあることと、土層の観察から、未完成横穴-2は第7層堆積後に掘削されたと考えられる。第7層は4-45号墳の天井崩落に伴うものであることから、4-45号墳崩落後に、未完成横穴-2が掘削されていることになる。縦断面をみると、未完成横穴-2と取り付く部分で、第7層の上面が段状に平坦面をなしていることがわかる。第7層は、墓道先端方向へ徐々に下がり、墓道床面に至り、墓道先端には及んでいない。



4-45号墳と未完成横穴-2の関係について整理すると、以下のようなになる。4-45号墳は掘削後間もなく天井が崩落した。その後、崩落土を一部整形し、未完成横穴-2が掘削された。その際、墓道先端部は地山を床面としており、堆積土が見られないことから、崩落後、すぐに未完成横穴-2の掘削に着手しているようである。第5・6層は、未完成横穴-2の掘削後に堆積したものである。両者は墓道を共有していることから、非常に強い関係を有していると考えられ、上述のような状況から、崩落した4-45号墳に替わる横穴を掘削するために、未完成横穴-2を掘削したものと思える。しかし、これは未完成に終わっている。

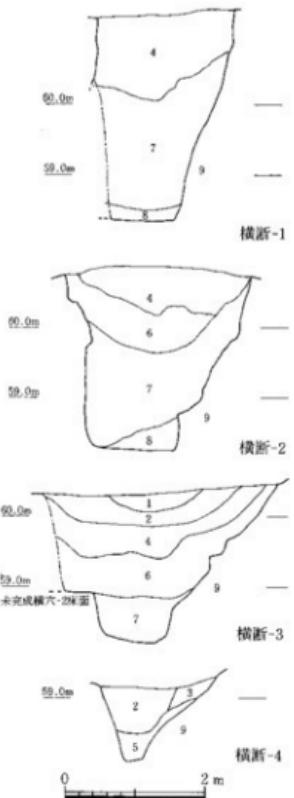


図-11 4-45号墳横断土層面

混入として片付けるわけにはいかない面がある。たとえば、横穴崩壊後の祭祀行為に伴う遺物の可能性も残されていると思われる。

4-44号墳の墓道は、まっすぐ延びているのに対して、4-45号墳の墓道は、先端で東へと弧を描いている。また、墓道床面は、4-44号墳のほうが、少し低くなっている。これらの状況から考えると、4-44号墳のほうが古く、4-45号墳の墓道は4-44号墳の墓道から分岐したものではないかと推定される。未完成横穴-2は、更に4-45号墳墓道より分岐したものである。

4-45号墳の床面には、埋葬を示すような状況で、遺物が残存していた。原位置を留めているとは考えられないが、6個の人頭大の自然石は、棺台であろう。自然石上面はT.P. 58.58m前後で、ほぼ同レベルとなる。玄室中央付近から、数十片に割れた状態で、土師器の直口壺(11)が出土しているが、土器は、これ1点のみである。その他は、すべて鉄製品で、釘と鎌がみられる。鉄製品は4箇所でまとまって出土しているが、いずれも破損しており、完形のものはみられない。また、折れ曲がった釘も多くみられる。木目の遺存状態も悪い。(図-20)

これ以外の遺物は、すべて第1・2層から出土している。すなわち、4-45号墳の崩落後、未完成横穴-2の埋没以後の遺物である。須恵器杯身(5・6)、有蓋高杯(7)、高杯脚部(8・9)、壺(10)、家形埴輪(25・26・36)などである。須恵器杯身と有蓋高杯は、いずれも短い立ち上がりと浅い杯部からなる形態であり、6世紀末葉墳であろう。

第4層が、4-44号墳の第2層と同質であることから6世紀後葉と考えると、層位的には矛盾がない。しかし、4-44号墳も4-45号墳も、崩落後の埋没土から出土している点が問題点として残る。すなわち、横穴の掘削がこれ以前に済ることは確実でも、時期の決め手に欠けるものである。また、なぜ埋没後の土層から遺物が出土するのか、両横穴より高い位置には横穴が存在したとは考えられないことから、他横穴からの

上層からの出土ではあるが、遺物の年代、そして墓道の形態から考えると、4-44号墳、4-45号墳、未完成横穴-2の順に掘削されたものと思われる。しかも、4-44・45号墳は掘削後、間もなく天井が崩落しており、4-44号墳は埋葬を行なっていない可能性が強い。以上から、年代を推定すると、4-44号墳は6世紀中葉～後葉、4-45号墳はそれよりもやや遅れるものの、やはり6世紀中葉～後葉、そして未完成横穴-2は6世紀後葉墳と考えられるのである。しかも、3基が墓道を共有していることから、一家族によって造られ続けたものと考えることができる。

第4支群46号墳

北西向きの斜面に掘削された横穴である。墓道はN-40.5°-Wに延びる。墓道の天井部は残存しているようであるが、玄室天井は崩壊しているようである。墓道から玄室にかけて調査を実施した場合、壁面が崩壊する恐れがあり、危険性を伴うこと、そして、現状保存できることから、墓道のみ調査を実施し、墓道から玄室にかけては未調査である。

玄室と推定される部分の上面で、長さ210cm、幅150cmの三日月状の平面形を呈する遺構が検出された。埋土は赤褐色粘質土であり、後述する墓道の最上層埋土と一致する。その位置、埋土から、この遺構は天井部が崩落した玄室に当たると考えられる。埋土を検出面から約20cm掘り下げ、その平面形を確認したのみで、それ以上の掘削は行なっていない。

墓道部分は、90cm以上の幅で天井が残存しているようである。未調査のため、その平面形は確認できないが、長さは100cm前後と推定される。

墓道は2～3段に彫り込まれ、壁面下部は垂直に近い傾斜となる。特に、上面は南東部へ大きく張り出し、丁寧に整形されている。この部分は、試掘調査時に玄室左側壁と推定した部分に当たる。断面-2の土層を検討する限りにおいては、4-46・47号墳埋没後に、何らかの目的で堀り広げられた可能性が考えられる。床面の平面形は、奥門付近でラッパ状に開く形態となり、先端は調査区外へのびている。長さは260cm以上、奥門付近での幅は170cm以上、調査区内の先端幅は74cmとなる。高さは、奥門付近で約300cm、先端で約240cmである。墓道右側壁の床面より60cm以上高い位置に、4-47号墳の墓道が取り付く。4-47号墳の墓道は東に延びており、取り付け部で若干北に振っている。

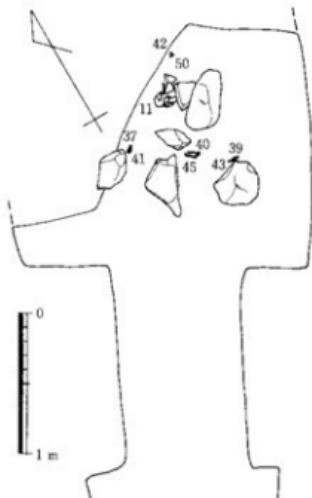


図-12 4-45号墳遺物出土状況



図-13 遺構平面図②

土層を観察すると、まず最下層に第13層明灰白色砂質土が見られる。第13層は羨道側で厚さ100cm、墓道先端で厚さ20cmとなり、羨道から墓道へと徐々に薄くなる。地山と同質の砂質土であることから、羨道から玄室部を中心に、その壁面や天井が少しづつ崩壊したものと考えられる。その上層には、第12層黒褐色粘質土が見られ、かなりの期間、崩落が停止していたものと考えられる。第12層が羨道に及んでいないことから、この時期には玄室天井部がまだ崩落していないと考えられる。その上層、第11層には、地山ブロックを多量に含む灰白色砂質土が堆積し、壁面・天井部の崩落を示すものと考えられる。厚さは20~30cmで厚くはないが、これは、羨道から墓道にかけての崩落が小さかったためであり、おそらく玄室内には1m以上の厚さで第11層が堆積していると考えられる。

第11層の堆積後、すなわち4-46号墳の玄室天井部崩落後に、4-47号墳の墓道が掘られている。4-47号墳の墓道埋土である第9層暗灰白色砂質土が、第11・12層を切り込んでおり、断面-4で、その状況がよく観察できる。

その後、先述のように、何らかの目的で、4-46号墳墓道南東部が拡張されている。新たな横穴の掘削を始めた痕跡とも考えられる。この拡張部を含めて、4-46号墳から4-47号墳にかけて、第8層赤褐色粘質土が見られる。これは、崩落した玄室天井部、羨門最上層の埋土に一致し、玄室の崩落天井部からの流入土を中心と堆積したものと考えられる。断面-4を観察すると第8層上面が羨道から墓道へかけて傾斜していることが、このことを示している。そして、第8層によって、4-46号墳の玄室から羨道にかけては、完全に埋没したことになる。

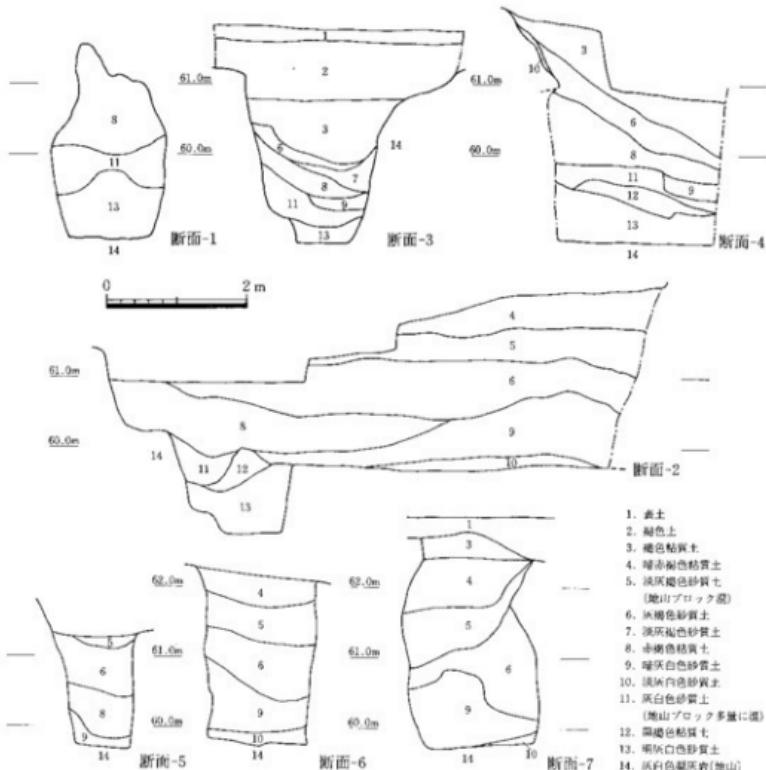


図-14 4-46・47号墳断面土層図

4-46号墳墓道から出土した遺物の大半は埴輪であり、第8層から須恵器平瓶の口縁など、僅かな土師器・須恵器が出土しているのみである。埴輪は有黒斑のものと無黒斑のものに分けられる。有黒斑では、円筒埴輪(14~17)、朝顔形埴輪(19)、家形埴輪(24)がみられる。14・17・19・24は第8層から、15・16は第13層から出土している。その中でも、14の円筒埴輪は全体の約70%が残存している。4-47号墳墓道の取り付き部から出土しており、層位的には、4-47号墳の墓道埋土からの出土とするべきものである。無黒斑の埴輪は、すべて円筒埴輪(29~33)であり、30は第13層から出土、他は第8層から出土している。唯一、第13層から出土した円筒埴輪(30)は、口縁部を欠いているが、全体の約60%が残存している。やはり、下層のものほど、つまり古く埋没したものはほど残存状態が良好であると言える。

出土遺物からは、4-46号墳の時期を決定できるものは、みられなかった。

第4支群47号墳

墓道のみを調査しており、羨道から玄室にかけては調査区外へ延びている。しかし、1986年度の調査の際に、今回の調査区から3.2m東側まで調査しているにもかかわらず、4-47号墳の玄室は確認されていない。玄室の天井が完存していたために、調査で検出できなかっただけか、もしくは、4-47号墳が未完成で掘削を終えていることも考えられる。断面-7から明らかのように、羨道の天井は崩落していると考えられる。にもかかわらず、玄室の天井が完存していることは考え難いため、後者の可能性が大であると考えられる。しかし、未完成と確認できる資料がないため、横穴として4-47号墳の名称を与えておく。

墓道は、S-80°-Wの方向にのび、4-46号墳の墓道に接する部分から先端は、北へ振っている。墓道の長さは6.6m以上、幅は最大で170cm、最小で70cmとなる。先述のように、4-46号墳の玄室天井部崩落後、墓道を一部整形して造られている。

埋土は、灰白色系の砂質土である第9・10層を最下層とする。これは、4-47号墳墓道掘削後、間もなく、壁面の少しづつの崩壊等によって堆積したものであろう。その後、4-46号墳を埋没させた第8層が流入し、その上層は、第9・10層に酷似した第5・6層が堆積するが、地山ブロックを含んでいることから、かなり崩壊は激しかったようである。第4層暗赤褐色粘質土は、第8層同様に、流入土によるものであろう。

墓道北東端の第4層から、須恵器有蓋高杯の蓋(12)、堤瓶(13)が出土しているが、第5層より下層では、埴輪以外は全く出土していない。埴輪は円筒埴輪に限られ、有黒斑のもの(18・22・23)と無黒斑のもの(27・28)がみられる。前者はいずれも第6層から、後者はいずれも第9層から出土している。4-46号墳の出土状況も考慮に入れるに、有黒斑の埴輪は第6～13層から出土し、無黒斑の埴輪は第8～13層から出土していることになる。そして、有黒斑の埴輪は土層ごとの偏りが少なく、無黒斑の埴輪は第8・9層に集中していることがわかる。

第4層出土の須恵器から、4-47号墳が埋没した年代は、6世紀後葉～7世紀初頭と考えられる。これ以外に出土遺物がないため、明確にはできないが、4-46号墳、47号墳の順に、6世紀後葉前後に掘削されたものではないかと考えられる。

未完成横穴-1

未完成横穴-1は、4-45号墳とほぼ平行に、約4m西側に位置する。主軸はS-31.5°-W。墓道から羨道にかけては、ほぼ完成しているが、玄室を掘り始めた状態で放棄されている。

墓道の長さは5.8m、幅は羨門部で126cm、先端で90cmを測る。壁面の高さは、羨門部で146cmを測り、先端に向かって徐々に低くなる。墓道の先端は、緩やかに西へ振っている。壁面はかなり崩落しているものの、残存部分は平滑に仕上げられており、墓道の掘削が、ほぼ終了していることがわかる。羨道と墓道先端の床面の比高差は約10cmであり、床面がほぼ平坦であることがわかる。これも、墓道が完成していることを示すものであろう。

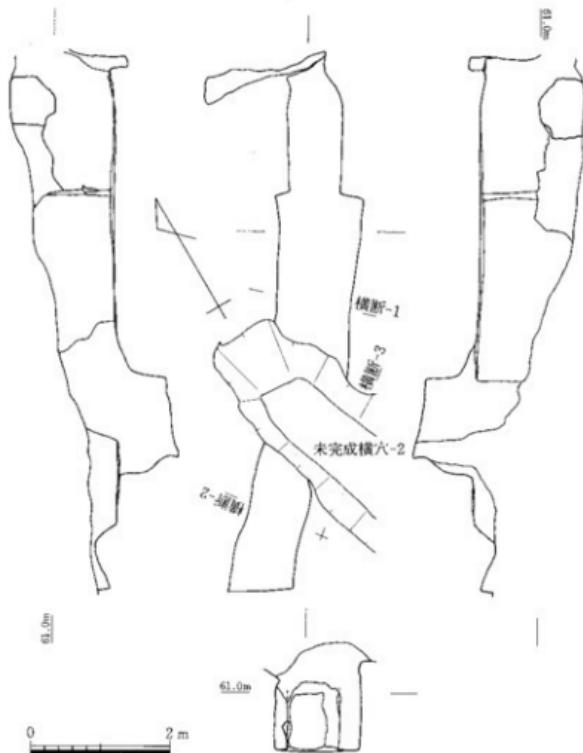


図-15 未完成横穴-1

羨道は長さ約176cm、幅は玄門部で60cm、羨門部で74cmを測る。天井は、かろうじて残っているものの、原状を留めていない。壁面の高さは約80cmを測る。玄室に近い部分は、やや幅が狭くなっている。未完成であることがわかる。壁面にも、工具痕が残されている。非常に狭長な平面形を呈する羨道である。

玄室は、右前壁・右側壁側に一部を掘削した時点で掘削を中止している。玄室右前壁と羨道は、約70°の角度で取り付き、羨道がかなり右へ振っている。玄室床面は羨道床面より約24cm低くなっている。先述のように、羨道から墓道にかけての床面は完成していると考えられ、玄室床面が墓道先端より低いことから考えると、意識的に掘り下げているようである。高井田横穴群内では、玄室床面が羨道床面より数cm低い例はあるが、10cm以上も低い例はみられない。未完成のため詳細は不明であるが、興味深い事例である。

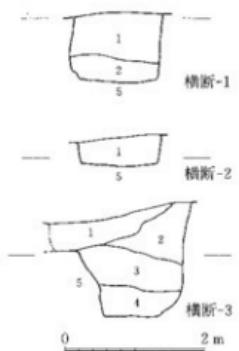


図-16 未完成横穴-1・2
横断面図土層図

未完成横穴-2

未完成横穴-2は、墓道掘削時に掘削を中止したものである。墓道先端は、4-45号墳に取り付き、4-45号墳の天井が崩落し、墓道がある程度埋没した時点で掘削されたものである。主軸はS-18°-E。側壁は垂直に近い面をなすが、掘削途中の北端部は凹凸が激しく、床面にもややみられる。

長さは、4-45号墳墓道との取り付け部までで5.8mを測る。幅は北端で約70cm、取り付け部で約120cmとなり、通有の墓道とは逆の平面形を呈する。北端と南端での床面の比高差は、約40cmとなり、南端のほうがかなり低くなっている。

埋土は、下層が灰褐色・灰白色の砂質土、上層が未完成横穴-1の埋土である第2層暗灰色砂質土・第1層赤褐色粘質土である。土層から、未完成横穴-2が先行すると考えられ、未完成横穴-1の掘削時には、未完成横穴-2は、完全には埋没していなかったと考えられる。

埋土からは遺物は全く出土していないが、4-45号墳の上層から出土した遺物は、実際には未完成横穴-2を掘削した後の埋土から出土した遺物である。したがって、未完成横穴-2の時期も、ほぼ推定できる。

註

- (1) 左右は、玄室から羨道を見た場合のものである。

また、玄室右前壁部分のみ掘削していることも注意したい。おそらく、玄室掘削に当たって、まず右前壁の位置、そして右側壁の位置を決めようとしたのではないかと考えられる。他の未完成横穴の例では、玄室中央から掘り始め、放射状に掘り広げているようであるが、未完成横穴-1では、玄室の幅を先に決定しようとしたと考えられる。この差は、地山が硬質か軟質かの相異に基づくものか、単なる掘削方法の相異に基づくものかは判断できない。

未完成横穴-1の埋土からは、遺物が全く出土しておらず、時期を決定できない。ただし、土層でみる限りにおいては、未完成横穴-2より新しいと考えられ、4-44号墳、4-45号墳、未完成横穴-2、未完成横穴-1という順に造られたことになる。そうすれば、未完成横穴-1の時期は、6世紀末葉以後と推定される。羨道が狭長なこと、特に高さが低いことは、新しい時期の横穴の特徴を示していると考えてもよいであろう。

4. 遺物

遺物は、すべて横穴の埋土から出土しており、須恵器、土師器、埴輪、鉄釘が出土している。

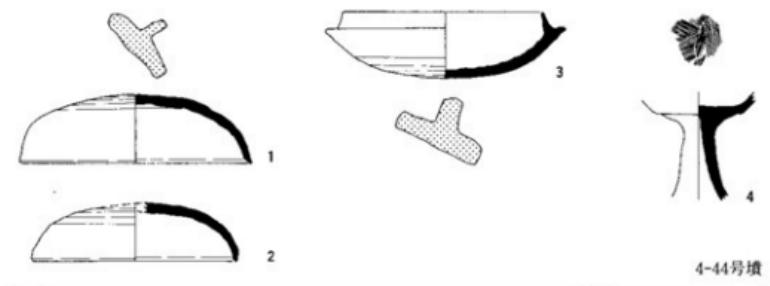
1～4は、4-44号墳埋土から出土している。1・2は須恵器杯蓋。1は口径16.4cm、外面の稜はみられないが、口縁端部は内傾する面をなす。2は口径14.2cm、小形で扁平な形態である。3は須恵器杯身。立ち上がりは短く、内傾する。1・3の外面天井部と底部には、赤色顔料による「T」、もしくは「十」の印が描かれている。両者は、法量・胎土・焼成からセットをなすものと考えられ、同じ記号が印されていて興味深い。4は土師器高杯。口縁と脚裾部を欠く。杯部外面には段がみられる。

5～11は、4-45号墳埋土から出土しているが、5～10は、未完成横穴-2掘削後の埋土、11のみは、玄室床面から出土している。5・6は須恵器杯身。立ち上がりは内傾した後、端部で上方に立ち上がる。7は須恵器有蓋高杯。杯部の形態は5・6に酷似し、脚部は短く、裾広がりとなる。8・9は須恵器の高杯脚部。8は低く、外方へふんばる形態であり、直径3mmの小円孔が穿たれている。9は長脚二段二方透しの脚部。裾部に四線がめぐり、端部は上方に鋭く立ち上がる。透し孔は長方形であるが、その幅は確認できない。10は須恵器広口壺。口縁部を欠く。頸部はヘラ書きの直線文を縦位に施した後、上・中・下段に、それぞれ1・2・3条の凹線をめぐらせる。体部はやや扁平な球形を呈し、外面は平行叩きの後にカキメ、内面は同心円叩きを一部すり消している。11は土師器の広口壺。やや下ぶくれの体部から、口縁は上外方へ直線状にのびる。外面頸部は縦方向のヘラミガキ、体部は横方向のヘラミガキ、底部はヘラケズリ調整である。内面はナデ調整。

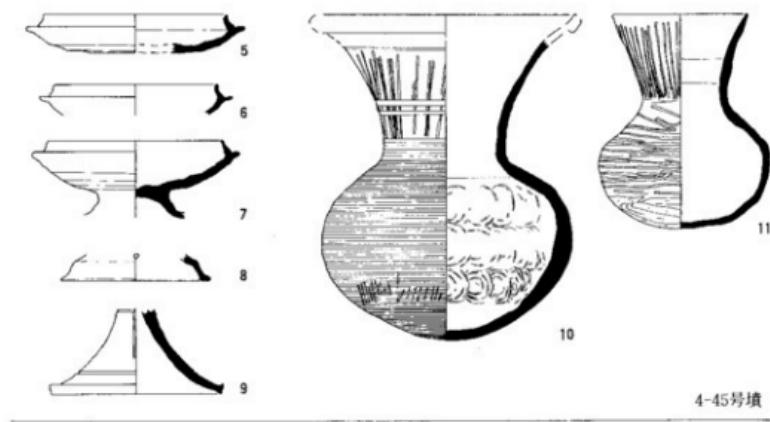
12・13は、4-47号墳埋土から出土している。12は須恵器有蓋高杯の蓋。扁平なつまみを付し、天井と口縁の境には鋭い稜がみられる。13は提瓶。口縁端部を欠くが、他は完存する。外面正面はカキメ、背面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整。把手は当初から伴わない。

14～36は埴輪である。埴輪は、有黒斑のもの（14～26）と無黒斑のもの（27～36）がある。

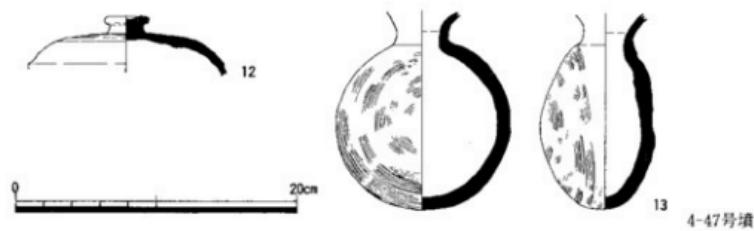
14～26は有黒斑の埴輪であり、14～23は円筒、および朝顔形埴輪、24～26は家形埴輪である。全形を復元できる円筒埴輪は14のみである。14は3凸帯4段の形態であり、口径39.4cm、底径20.6cm、器高54.5cmを測る。口縁は端部でやや外反し、丸くおさめる。底部底面は平坦面をなす。凸帯の突出度は高く、透孔は基底部と体部第2段の対向する位置に、いびつな円形の透孔が穿たれている。外面はタテハケ調整、口縁部にヘラ記号がみられる。内面はナデ調整を主とするが、一部に横方向のハケメ、およびこのハケメをナデ消した痕跡が残る。基底部は、5～6枚の粘土板を縫いで、成形している。15～17は円筒埴輪口縁部。15は体部から直線的にのび、端部で面をなす。16は14と同形態、17は水平に外反し、端部はやや下方に垂下し、凹面状をなす。18は朝顔形埴輪口縁部、19は頸部である。19は、実際にはもう少し外傾するものと思われる。凸帯の突出度は高い。



4-44号墳



4-45号墳



4-47号墳

图-17 横穴出土土器

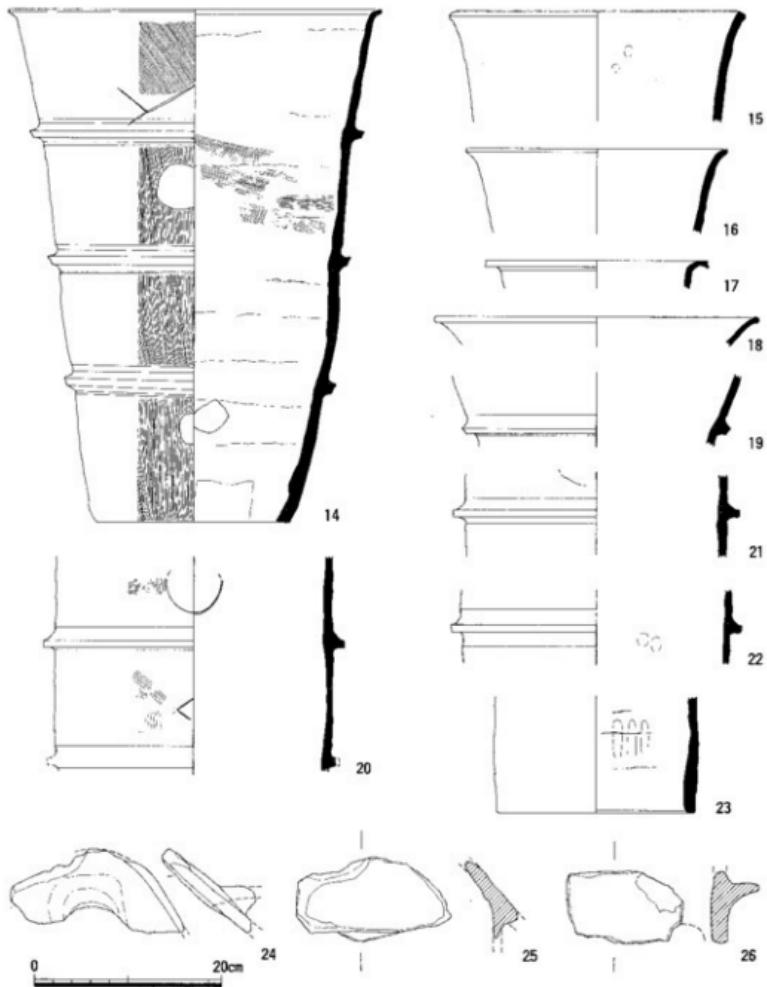


図-18 墓輪①

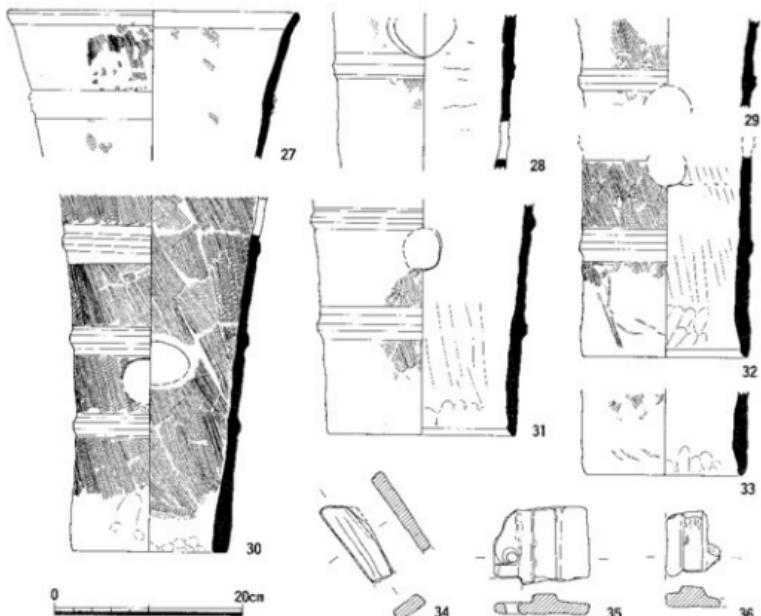


図-19 墓輪②

20~22は体部。凸帯は幅よりも高さの方が高く、非常に突出度の高いものである。20の外面は粗いタテハケ、21・22は不明。内面はいずれもナデ調整のようである。20の外面には、ヘラ記号かと思える線刻がある。23は底部。外面はナデ、内面はナデ・ユビナデ調整で、粘土帶の痕跡が残る。特別な底部調整はみられない。

24~26は家形埴輪。24は切妻、もしくは入母屋の屋根部分。棟木が剥落している。24は軒部分であろうか。26は底部、半円形の切り込みがあり、床の表現と思える突出部を貼りつける。

27~36は無黒斑の埴輪。27~33は円筒埴輪、34は蓋形埴輪、35・36は家形埴輪と考えられる。円筒埴輪の口縁部は、体部から直線的に上外方へのび、端部は丸くおさめる。凸帯は、いずれも非常に低いものである。透孔は円形で、体部第1・3段に穿たれるようである。底部は平坦な面をなすもの(30)、内傾する面をなすもの(31・32)、器壁が徐々に薄くなり丸味をおびるもの(33)がある。外面はタテハケ、内面は縦方向のユビナデ調整。底部は外面ナデ、内面ユビオサエによる調整。32・33の底部外面には工具の当たり痕がみられ、板状工具によるナデが施されているようである。32には、ヘラによる線刻がみられる。偶然についたものか、ヘラ記号かは不明である。

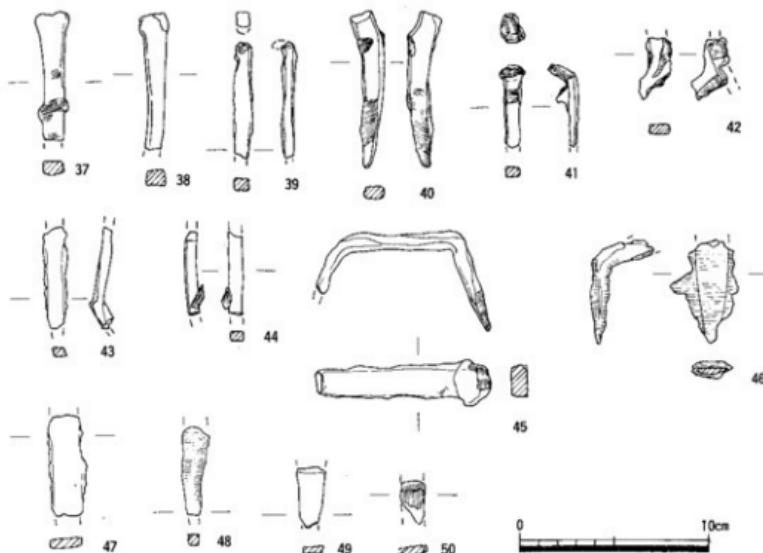


図-20 4-45号墳出土鉄製品

34は蓋形埴輪の立飾り部分である。外面の一方にのみ、2本の平行する直線が線刻されている。35・36は家形埴輪と思われる。柱を表現したと思われる突出部がみられ、35には円孔が穿たれています。

37~50は、4-45号墳の玄室床面から出土した鉄製品である。37~44は釘。頭部は「ハ」の字状に開く形態のもの（37・38）と、一方へ折り曲げた形態のもの（39）がみられ、前者のほうが大形のようである。折れ曲がったものが多く、全形を確認できるものはみられない。木目が残っている釘は、37・40~42であり、すべて横方向の木目である。44には、斜方向の木目を有する木片が付着している。

45~50は鎧。鎧も全形のわかるものは、みられない。断面は扁平な長方形を呈し、幅1.6cm、厚さ0.9cmを測る。45・46・48には横方向の木目が、50には縦方向の木目が残る。

釘・鎧は残存状態が悪く、また、玄室を完掘していないため、木棺の規模・構造等を復元することはできない。その中で、すべてが破損していること、40~43の釘が折れ曲がっていることから、外力によって木棺が破壊されていることも考えられる。

第6章　まとめ

今回の調査で得られた主な成果を列挙すると下記のようになる。

1. 4-44～47号墳は、1986年度に調査を実施した第2支群57号墳（E号墳）を除くと、高井田横穴群内で最も標高の高い場所に位置する横穴である。
2. 標高が高いために凝灰岩の風化が激しく、各横穴の天井は崩落していた。しかし、埋土の土層から崩落、および埋没の過程を復元することができ、これによると、横穴掘削後、間もなく天井が崩落したことが確認できる。
3. 墓道を共有する例として、4-45号墳と未完成横穴-2、4-46号墳と47号墳があげられ、前者には4-44号墳の墓道も共有する可能性が考えられる。そして、未完成横穴-2と4-47号墳の墓道は、それぞれ4-45号墳と4-46号墳の墓道がある程度埋没した段階で掘削されていることが確認できる。このような例は、高井田横穴群内では初めて確認できたものである。
4. 土層の観察等によって、4-44号墳、45号墳、未完成横穴-1、未完成横穴-2という掘削順序がほぼ確認できる。おそらく同一家族によるものであろうが、4-45号墳を除くと、埋葬の痕跡はみられない。これらの横穴は、掘削ごとに、標高の高い位置へ移行している。
5. 未完成横穴-1・2によって、横穴の掘削方法を推定することができる。これまで考えられてきたように、墓道がほぼ完成した後に羨道へ、そして羨道がほぼ完成した後に玄室へと掘り進んでいるが、未完成横穴-1では、玄室を掘り進める前に、玄室の右側壁の位置、すなわち幅をまず決めようとしているようである。このような例は、これまでには確認されていなかつたものであり、玄室の掘削方法に新たな問題を提起した。また、未完成横穴-1において、玄室床面が羨道床面より低くなっている点も注目すべきことであろう。
6. 4-45号墳上層から出土した須恵器杯蓋・杯身のセットには、いずれも外面中央に赤色顔料による記号が印されており、何らかの意味をもつものと考えられる。上層からではあるが、横穴に伴う祭祀等に使用されたことも考えられ、集落から出土する同種の須恵器と比較検討し、その意義について考えることが必要であろう。
7. 増輪がかなり出土しているが、有黒斑の増輪は、過去の調査で出土した壺形埴輪などと同時期のものと推定され、その出土位置から、4-46号墳の南側付近に前期末葉の古墳が存在し、完全に削平されたものと考えられる。
8. 無黒斑の増輪については、これまで5世紀末葉から6世紀前葉墳の木棺直葬墳が存在したものと考えていたが、かなり広範囲から出土することを考えると、横穴の墓道肩部等に樹立されていた可能性も検討していかざるを得ないであろう。

以上のような成果を、今後、高井田横穴群の理解を深めるための資料にしたいと考えている。

図 版



第5トレンチ（東から）



第6トレンチ（南から）



遠景（北から・中央遠方が二上山）



南壁土層



4-44・45号墳検出状況



4-44・45号墳調査後



南から



北から

橫斷—1



橫斷—2



图版 6
4—45号填



全景



近景



北から



北から



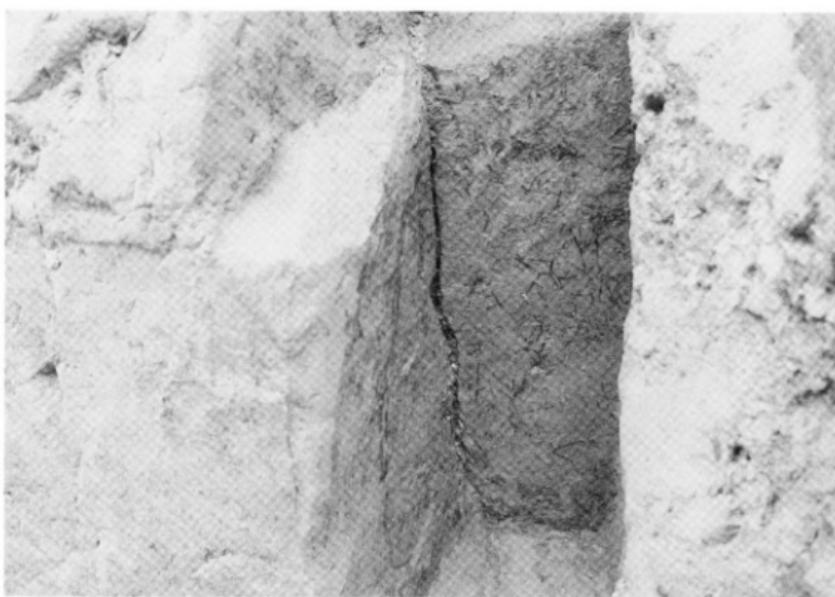
玄室床面（東から）



遺物出土状況（南から）



玄室左側壁



玄室右側壁・前壁



橫斷—1



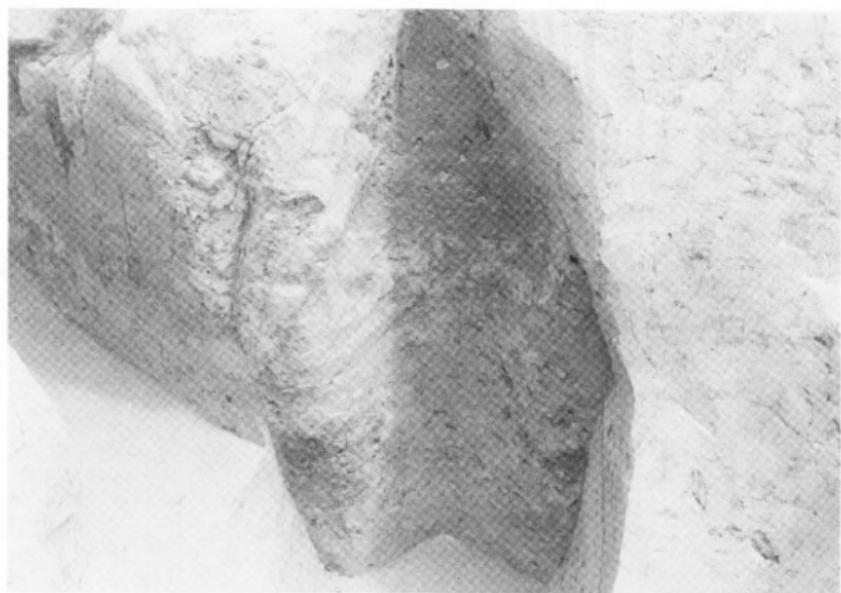
橫斷—2



4—46・47号墳



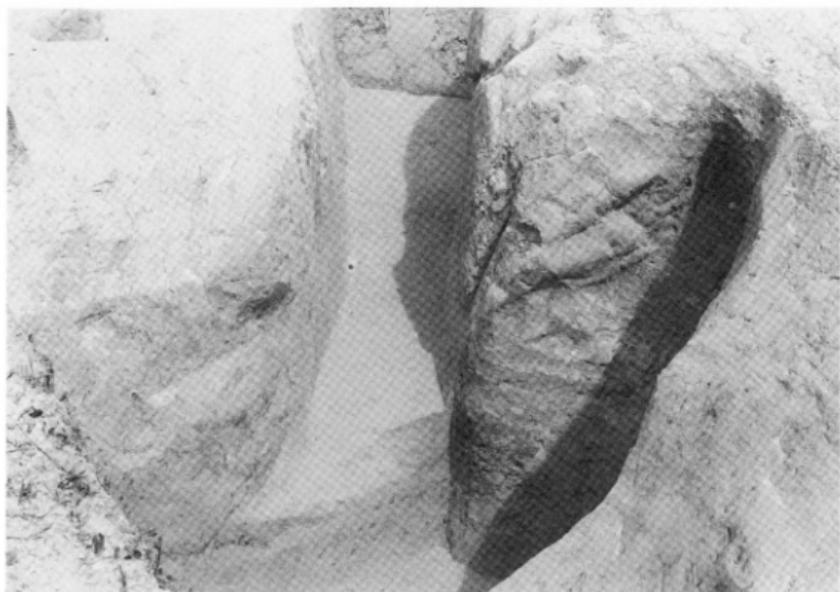
4—46号墳玄室崩落検出状況



漢門



圓筒鐘輪出土狀況



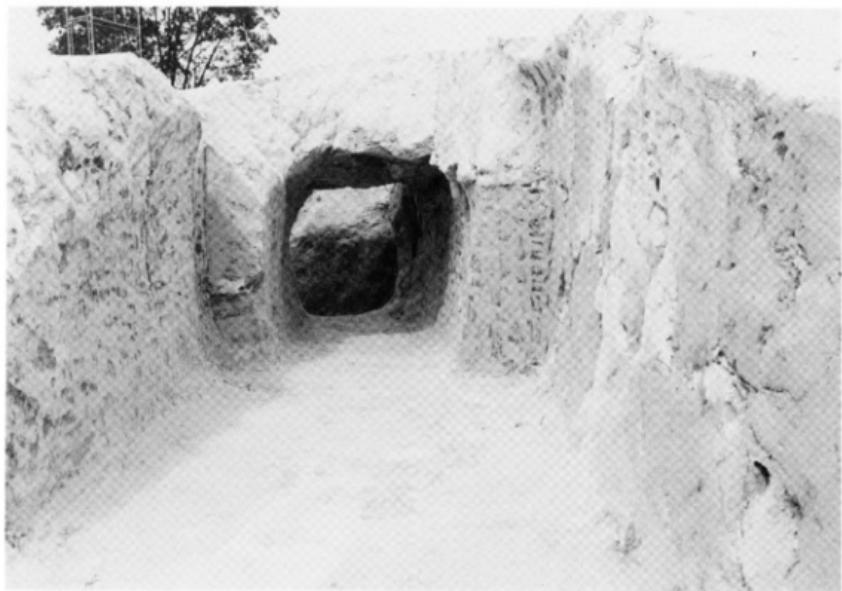
西から



東から



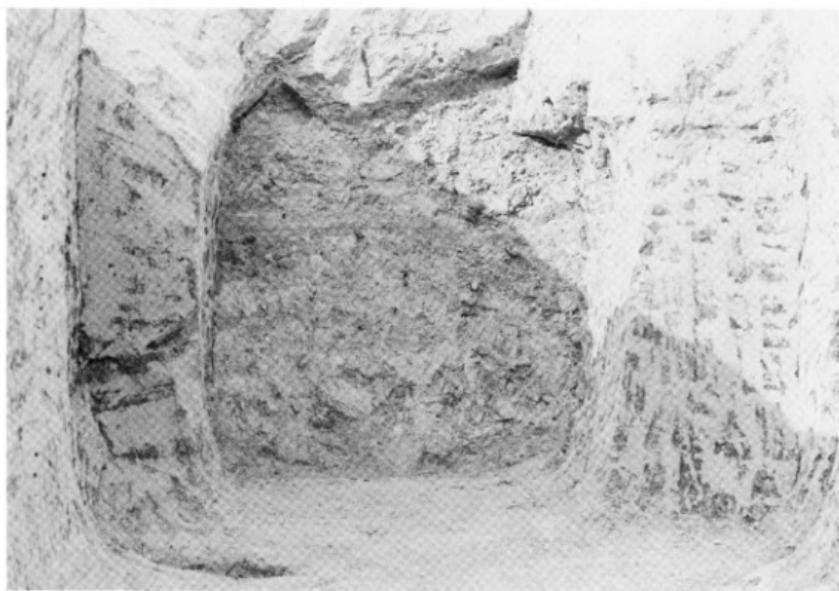
全景



近景



北から



淡門



全景



近景



北から



南から



1



2



3



7



10



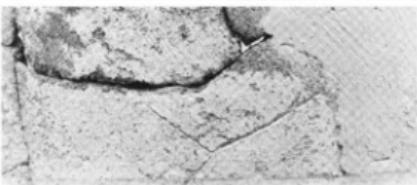
11



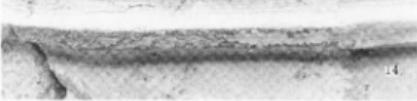
13



14



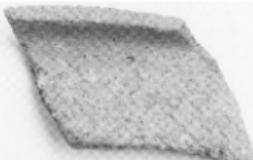
14



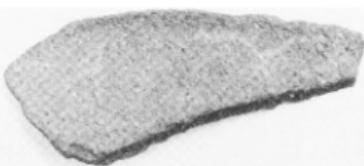
14



14



17



18



30



28



32



高井田横穴群Ⅲ

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成3年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

